

## ビッグサイエンスを題材とした市民参加型科学コミュニケーション

○三澤 透<sup>1</sup> 縣 秀彦<sup>2</sup> 松本市 教育文化センター<sup>3</sup> 石田 大<sup>4</sup> 高梨 直紘<sup>5</sup> 鈴木 悠太<sup>1</sup> 渡部 潤一<sup>6</sup> 臼田 知史<sup>2</sup> 平林 久<sup>7</sup> 小山 茂喜<sup>1</sup>  
高野 嘉寿彦<sup>1</sup> (1.信州大学 2.国立天文台 3.松本市教育文化センター 4.セイコーエプソン 5.東京大学 6.京都産業大学  
7.JAXA)

近年、自然科学は急速に発展し、驚くべき成果が次々と生まれている。一方で、市民の科学リテラシーとの乖離も広がり、研究の意義が十分に伝わらない場面が増えている。特に、巨額の資金と長期的視点を要する「ビッグサイエンス」においては、その恩恵や課題を理解し、適切に判断できる市民社会の形成が重要となっている。そこで我々は、自然科学分野の最前線と一般市民の科学リテラシーとの隔たりを効果的に埋める試みを進めている。具体的には、(1) 観測天文学の将来計画の一つとして掲げられている「宇宙の地図作り」を実践し、市民に科学の最前線に触れる機会を提供すること、(2) 既存あるいは計画段階にあるビッグサイエンスに関わる研究者によるセミナーを開催し、市民と研究者の相互理解を促進すること、の二つのプロジェクトを実施している。

本講演では、前者の「宇宙の地図作り」イベントについて、その詳細を報告する。本イベントでは、遠方クエーサーの高分散スペクトルから銀河間ガスによる吸収線を探し出し、参加者が協力して銀河間ガスによる「見えない宇宙」の地図を作成する。地域の科学館の協力を得て令和4年度に開始した本イベントは、これまでに5回開催されている。さらに、吸収線探査に用いていた既存コードが研究者向けであり、市民利用には適していなかったことから、昨年度、科研費を用いて市民向けコード (Code for Handling Absorption Profiles with Python; CHAPPY) を新たに開発した。本コードはGitHub上で無償公開を予定しており、多くの方々に活用していただきたいと考えている。